追慕

宮本百合子

青空文庫

今日は心持の好い日だ。

空がくっきりと晴れ渡って、刷き寄せられるような白雲が、青い穂先の楡の梢を掠めて、彼方の山並の間に畳まって行く。

凝(じっ)と坐って耳を傾けると、目の下の湖では淡黄色い細砂に当って溶ける優婉な漣の音が、揺れる楊柳の葉触れにつれて、軽く、柔く、サ……、サ……、と通って来る。心持のよい日だ。

私の周囲を取繞く総てのものは、皆七月の太陽を身に浴びて嬉々として輝やいている。田舎らしい単純と、避暑地のもつ軽快な華美とが見えない宙で溶け合って、一種の気囲気を作っている此処では、人間の楽しい魂が、何時も花の咲く野山や、ホテルの白い水楼で古風なワルツを踊っているような気がする。

濃碧の湖には笑を乗せて軽舸が浮く。街道の古い並木の下では赤い小猿が、手提琴の囃子につれて、日は終日帽子を振る。銀灰色の猫の児は今日も私のポーチで居睡っているだろう。

周囲は陽気で健康で、美しい。けれども今日は心が淋しい。重い苦しい寂寥では無い。今日の空気のように平明な心が、微かながら果もなく流れ動く淋しさである。

隅から隅まで小波も立てずに流れる魂の上に、種々の思いが夏雲のように湧いて来る。真個(ほんと)に——。考えではない、思いである。

歌を詠みたい。けれども私に歌は出来ない。其故斯うして散文を書いて見る。今の私の心持には、此の散文も詩に近いような思いの律動を以て浮んで来るのである。

魂が洗練されない事は恐ろしい。人にも、自分にも沢山の見える見えない悲劇を与える。自分の為に或る幾つかの魂が苦しみ、歎き、沈黙の忍従に頭垂れていても、知らなければ解らない。無智は不明は、敵意の無い挑戦者である。

魂の深みを顧みて見ると、そういう風な悔恨を沁々と味わずには居られない。

此は決して郷愁がさせる業でもなければ、感傷主義の私生児でもない。其は確だ。一つでも、その半片でも、人間が受けている、或は受けなければならない苦難を知ると、その一点を中心として四囲に発散している種々の光彩を見、感じる事が出来るように成るのではあるまいか、私の魂が粗野で、先頃までは鈍かった感触が此頃漸々(ようよう)有るべき発育を遂げたらしい心持がする。人間が次第次第に、その五体的の複雑性を増して来る。ありがたい事だと思う。

彼の時分に、自分も受け、人にも授けた苦痛の数々が、如何か無駄では無いように成って欲しいと思う。如何な意味に於ても、自分に受けたものはきっと自分の裡の何かに成っている。だからよい。けれども人に与えられたものは謝したい。謝さずにはいられない心持がする。そういう人々の裡には愛すべき両親もいる。其他二三の人もいる。皆の生活が真実で、真剣で、あるべきようにあればよいな、と思う。静謐な祈願である。

「天心たかく——まぶたひたと瞑ぢて——気澄み　風も死したり
あゝ善良き日かな
双手はわが神の聖膝(みひざ)の上にあらむ」
天心たかく——まぶたひたと瞑ぢて——まぶたひたと瞑ぢて——

無我の瞬時、魂は自由な飛翔をすると思う。其時に「人」はよく

なる。生きる霊魂には斯ういう忘我がなければならない。小細工に理窟で修繕するのではない根からすっかり洗われるのだ。そして軽々と「果」を超える。只一点に成るのだ。

昔小学校で送った幾年かの記憶は、渾沌としている。其の渾沌の裡に只三つ丈光った星座がある。私と、愛弟と或る青年の先生とである。

其時分、先生はもう大人だと思っていた。十二三の自分は、理性と感情との不均斉から絶えず苦しんでいた。恐ろしく孤独だった。世界が地獄のようであった。そして、今年十九に成った愛弟は、まだ純白な小羊であったのである。

その先生の夢を思い掛けず此間の晩に見た。先生は昔のように細面な、敏感な、眼の潤うた青年で居られた。するとその翌朝故国から来た弟の手紙が、計らずもその先生の断片的な消息を齎して来た、私は生れて始めて、此丈符合した夢を見た。人が呼ぶ偶然の裡には不思議がある。

考えて見れば、大人だと思っていた先生も彼の頃はまだ真個の青年で居られたのだ。恐らく今の私よりもっと多分に「五月の日光」に浴して居られたのだろう。

先生は Romantist であった。感情的な自分もそうであった。土偶（でく）のように感興の固定した先生の群の中で、彼の先生だけが生きた先生に思った。愛すべき青年の先生は私の前で英雄と神との境へまで挙げられたのである。その伝説的に高貴であった先生が、私の今日まで育って来た個性の傾向を知って、励まして下さった歓びは、恐らく私の一生を通じてその光輝を失う事は無いだろう。

此の感謝は、上の学校へ行ってから、同じような純粋な愛で、私の行く道に力強い暗示を与えて下さったもう一人の先生の名と倶に、永久に私の記憶に彫られている。

自分が種々の事物に触れて来るに連れて、彼の青年の先生に対する追慕は、今、一人の純粋な青年に対する心と成っている。

自分が悪い沢山の事を知ったように、彼の先生も種々の醜い事を知ったり知らされたりなさっただろう、そして又その醜悪に対比した「よさ」、より輝き、より恒久的な真実の「よさ」をも、見出し、或は見出そうと仕て居られるだろう、先生も育たれた。私も育った。

先生は今何処に被居（いら）っしゃいますか。

生命の萌芽が、一寸の幹を所有するまでの専念な営み——。人は其前に頭を垂れる心を持つべきではないだろうか。

先生は可愛いのだから、此那事を云いたく無い、厭だ厭だと思いながら、西日の差す塵っぽい廊下の角で、息をつまらせて口答えを仕たお下髪（さげ）の自分を思う。——その時分私は自分を詩人だと思っていた——。

七月の日は麗わしい。天地は光りに満ちている。が心に微風（そよかぜ）が吹く——あとから、あとから微風が吹いて通る——。

〔一九二〇年二月〕

青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集　第十七巻」新日本出版社
1981（昭和56）年3月20日初版発行
1986（昭和61）年3月20日第4刷発行
初出：「大横浜」
1920（大正9）年2月号
入力：柴田卓治
校正：磐余彦
2003年9月15日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

追慕

宮本百合子

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/